【補訂２版】池田本校訂本文「若紫」巻小見出し（108 項目）

現在、池田本の校訂本文を作成中です。「若紫」巻に着手しました。
まずは、「桐壺」巻にならった詳細な小見出しができあがりました。
これは淺川槙子さん（国文学研究資料館・研究員）の労作に代表理事の伊藤が手を入れたものです。

【補訂２版】としていますが、初版とは小見出しの文言のみならず、参照情報にも手が入っています。
項目数は、１０８件のままです。
「若紫」に関する小見出しは、この【補訂２版】を活用してください。

この「若紫」巻の小見出しは、「桐壺」巻と同じように３０文字に制限した文字数でできています。
小刻みに物語を分割し、全１０８項目が並ぶものとなりました。
参考までに、『新編日本古典文学全集』（小学館）は２６項目、『新日本古典文学大系』（岩波書店）は３８項目なので、これがいかに多いかがわかります。

今回の公表にあたり、以下の３種類の情報を並べてみました。

（１）通し番号　小見出し（３０文字）
（２）（池）池田本（旧翻字形式）※小見出しに対応する一部分を引用

（３）参照情報（池田本の丁数／大島本の丁数／小見出しが該当する最初の文節番号／『源氏物語大成』第１冊（中央公論社、1984 年普及版初版）頁・行数／『源氏物語別本集成続　第２巻若紫～花宴』（おうふう、2005 年初版）／『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、1994 年初版）

【補訂２版】　「若紫」巻の小見出し（池田本の場合）

■１　瘧病をわずらった光源氏はすすめにより北山の聖のもとへ出かける
（池）わらはやみにわつらひたまひて
（一オ／一オ／050001／151①／10／199）

■２　聖は、峰が高い山に囲まれた奥深いところに籠り、修行をしている
（池）三月のつごもりなれば
（一ウ／一ウ／050074／151⑦／12／199）

■３　光源氏は自分を誰とも知らせず、驚き騒ぐ聖から加持祈祷を受ける
（池）のほり給て
（二オ／二オ／050110／151⑪／13／200）

■４　光源氏は高い所から見た目がきちんとしてきれいな僧坊を見つける
（池）すこしたちいてつゝ
（二ウ／二ウ／050162／152②／15／200）

■５　なにがし僧都の僧坊で、光源氏は若い女性と子どもたちの姿を見る
（池）きよけなるわらはなと
（三オ／三オ／050217／152⑧／17／201）

■６　供人たちは病を気にする光源氏を、気分転換のために外へ連れ出す
（池）君はをこなひしたまひつゝ
（三ウ／三オ／050250／152⑪／17／201）

■７　光源氏は後ろの山から、遠くまでずっと霞がかかった景色を眺める
（池）はるかにかすみわたりて
（三ウ／三ウ／050273／152⑬／18／202）

■８　良清は、光源氏に官位を捨てて播磨で暮らす明石の入道の話をする
（池）ちかき所にははりまの
（四オ／四オ／050327／153⑤／20／202）

■９　光源氏は話を聞いて、誇り高いという明石の入道の娘に興味を持つ
（池）さいつころまかりくたりて
（五ウ／五オ／050420／154①／23／203）

■10　明石の入道は上昇志向が強く娘は容貌と気立てが良いとの話が出る
（池）けしうはあらす
（六オ／五オ／050478／154⑥／25／203）

■11　供人たちは明石の入道の娘を洗練されていない娘であると言い合う
（池）かくいふははりまのかみの
（六ウ／六オ／050529／154⑫／27／204）

■12　娘を気にする光源氏を、供人は風変わりを好む性質があると察する
（池）君なに心ありて
（七オ／六ウ／050589／155④／29／204）

■13　都へ帰ろうとした光源氏は大徳の言葉に従って明け方まで滞在する
（池）くれかゝりぬれと
（七ウ／六ウ／050615／155⑦／30／205）

■14　夕暮れ時に僧房をかいま見た光源氏は、気品のある尼君を見つける
（池）日もいとなかきに
（八オ／七オ／050653／155⑪／32／205）

■15　光源氏は二人の女房と女童たちの中にかわいらしい少女を見い出す
（池）きよけなるおとなふたり
（八ウ／七ウ／050718／156④／34／206）

■16　幼い紫の上は、尼君に「雀の子を犬君が逃がした」と泣いて訴える
（池）なにことそやわらはへと
（九オ／八オ／050753／156⑨／35／206）

■17　雀を逃がして残念そうな紫の上の様子に少納言の乳母が立ち上がる
（池）このゐたるおとな
（九ウ／八ウ／050778／156⑪／37／206）

■18　尼君は自らの余命の少なさを語りつつ雀を追っている紫の上を諭す
（池）あま君いてあなおさなや
（九ウ／九オ／050809／157①／38／207）

■19　光源氏は、思いを寄せる藤壺に紫の上が本当によく似ていると思う
（池）つらつき
（十オ／九オ／050836／157④／39／207）

■20　尼君は亡くなった娘の話をしつつ、少納言の乳母と歌を詠み交わす
（池）あま君かみを
（十ウ／九ウ／050871／157⑦／40／207）

■21　僧都から光源氏の訪れを聞いた尼君は、恥じて簾をおろしてしまう
（池）僧都あなたよりきて
（十一ウ／十オ／050951／158④／43／208）

■22　僧都は尼君に、世間で評判である光源氏の姿を見てみないかと誘う
（池）このよにのゝしり給ふ
（十二オ／十ウ／050992／158⑧／44／209）

■23　光源氏は紫の上に強く心をひかれ、藤壺の身代わりにしたいと思う
（池）あはれなる人をみつるかな
（十二オ／十一オ／051024／158⑪／45／209）

■24　僧都の弟子は、光源氏が臥せるところにやって来て惟光を呼び出す
（池）うちふし給へるに
（十二ウ／十一ウ／051057／159①／47／210）

■25　僧都の弟子を通じて、光源氏はなにがしの僧都の招きを受け入れる
（池）いぬる十よ日の
（十三オ／十二オ／051097／159⑥／48／210）

■26　折り返し参上したなにがしの僧都とともに、光源氏は僧坊を訪れる
（池）すなはち僧都まいり給へり
（十三ウ／十二オ／051128／159⑨／49／210）

■27　光源氏を招くため、僧坊にある南面の部屋はさっぱりと整っている
（池）けにいと心ことに
（十四オ／十二ウ／051173／160①／51／211）

■28　光源氏は夢にかこつけて僧都から紫の上のことを聞き出そうとする
（池）僧都よのつねなき御ものかたり
（十四ウ／十三オ／051210／160⑤／52／211）

■29　僧都は光源氏に、妹の尼君が故按察使大納言の北の方であると語る
（池）うちわらひて
（十五オ／十三ウ／051265／160⑩／54／212）

■30　光源氏は僧都に故大納言と尼君の間に生まれた娘について質問する
（池）かの大納言のみむすめ
（十五ウ／十四オ／051309／161①／56／212）

■31　紫の上の素性を知った光源氏は、藤壺に似ていることに合点がいく
（池）さらはそのこなりけり
（十六オ／十四ウ／051383／161⑧／59／213）

■32　紫の上のことがいっそう気になった光源氏は、僧都に詳しく尋ねる
（池）いとあはれにものし給ふ
（十六ウ／十五オ／051412／161⑨／59／213）

■33　光源氏は僧都に幼い紫の上を後見することを尼君に話すように頼む
（池）あやしきことなれと
（十七オ／十五ウ／051449／162①／61／214）

■34　僧都は光源氏に、尼君に相談した上で返事をすると答えて堂に上る
（池）いとうれしかるへき
（十七ウ／十五ウ／051476／162④／62／214）

■35　光源氏は悩ましい気持ちになり、夜が更けても眠ることができない
（池）君は心ちもいとなやましきに
（十八オ／十六オ／051530／162⑩／64／215）

■36　奥の人が休んでいない気配を感じた光源氏は扇を鳴らして人を呼ぶ
（池）うちにも人の
（十八ウ／十六ウ／051569／162⑭／65／215）

■37　歌を詠んだ光源氏は、女房に尼君へ取り次いでもらうようにと頼む
（池）すこししそきて
（十九オ／十七オ／051606／163④／67／215）

■38　光源氏が紫の上にあてた歌を耳にした尼君は歌の内容を不審に思う
（池）あないまめかし
（十九ウ／十七ウ／051670／163⑫／69／216）

■39　歌を返した尼君に対し、光源氏は紫の上への切実な気持ちを訴える
（池）かうやうのつてなる
（二十オ／十八オ／051703／164③／70／217）

■40　困惑している尼君の気づまりな態度に光源氏は謙虚な言葉をかける
（池）うちつけにあさはかなりと
（二十ウ／十八ウ／051747／164⑧／72／217）

■41　光源氏は尼君に自分の体験を語りつつ、紫の上との結婚を申し出る
（池）あはれにうけ給はる
（二十一オ／十九オ／051773／164⑪／73／217）

■42　尼君は紫の上が幼く不似合いなことを理由に光源氏の申し出を断る
（池）いとうれしうおもひ
（二十一ウ／十九ウ／051814／165②／75／218）

■43　僧都がお勤めから帰って来られたので光源氏は尼君の前を退出する
（池）僧都おはしぬれは
（二十二オ／051870／165⑨／77／218）

■44　明け方、深山の景色を見ながら、光源氏は僧都と和歌の贈答をする
（池）あかつきかたになりにけれは
（二十二ウ／二十オ／051880／165⑩／77／219）

■45　身動きできぬ聖は、光源氏のために護身の修法をして陀羅尼を読む
（池）ひしりうこきも
（二十三オ／二十ウ／051948／166③／79／219）

■46　光源氏は迎えの人からの祝いと僧都から酒などのもてなしを受ける
（池）御むかへの人々
（二十三オ／二十一オ／051967／166④／80／220）

■47　杯をいただいた聖は涙をこぼして光源氏を拝み、守りの独鈷を渡す
（池）ひしり御かはらけ
（二十四オ／二十一ウ／052052／166③／83／219）

■48　紫の上を引き取りたい光源氏に尼君は四五年先ならばと返事をする
（池）うちにそうついり給て
（二十五オ／二十二ウ／052124／167⑩／86／222）

■49　光源氏を迎えに頭中将や左中弁たちなどの公達が都からやって来る
（池）御車にたてまつる程
（二十五ウ／二十三オ／052190／168②／88／222）

■50　頭中将は懐の横笛を出して吹き、弁の君は扇を鳴らし催馬楽を謡う
（池）頭中将ふところなりける
（二十六ウ／二十三ウ／052248／168⑧／90／222）

■51　僧都も自分から琴を持ち出して、光源氏に琴を弾いてほしいと頼む
（池）そうつきんを身つから
（二十七オ／二十四オ／052289／168⑬／92／223）

■52　光源氏の姿に法師と童べは感涙し、尼君たちや僧都は彼を絶賛する
（池）あかすくちおしと
（二十七オ／二十四ウ／052317／169①／93／224）

■53　幼心に光源氏に思いを寄せる紫の上は、人形に源氏の君と名付ける
（池）このわかきみおさな心ちに
（二十七ウ／二十五オ／052359／169⑥／94／224）

■54　帰京した光源氏は、宮中へあいさつに伺って父桐壺の帝と対面する
（池）きみはまつは内にまいり給て
（二十八オ／二十五オ／052399／169⑩／95／225）

■55　宮中を出た光源氏は、正妻葵の上の実家である左大臣邸へと向かう
（池）大殿まいりあひ給て
（二十八ウ／二十五ウ／052433／169⑭／97／225）

■56　光源氏は久しぶりに葵の上と対面するものの、二人の心は通わない
（池）殿にもおはしますらんと
（二十九オ／二十六オ／052482／170⑤／99／226）

■57　古い歌を引用して恨み言を述べる葵の上を光源氏は避けようとする
（池）からうしてとはぬは
（三十オ／二十七オ／052574／170⑭／102／226）

■58　光源氏は葵の上への不満と反対に紫の上への思いが強くなっていく
（池）かのわかくさのおひいてむ
（三十ウ／二十七ウ／052635／171⑩／104／227）

■59　帰京した翌日、光源氏は僧都や尼君などがいる北山へ消息をおくる
（池）又のひ御文たてまつれたまへり
（三十一オ／二十八オ／052682／171⑫／106／228）

■60　僧都からの返事を残念に思った光源氏は、惟光を使者として遣わす
（池）僧都の御返もおなしさまなれは
（三十二ウ／二十九オ／052774／172⑩／109／229）

■61　惟光は少納言の乳母に面会するものの、周囲の人々から警戒される
（池）わさとかう御文あるを
（三十二ウ／二十九ウ／052806／172⑬／111／229）

■62　光源氏は王命婦の手引きで、病気で里邸に退出中の藤壺と密通する
（池）ふちつほの宮なやみたまふ
（三十三ウ／三十オ／052889／173⑧／113／230）

■63　光源氏は邸に帰った後、藤壺と密通したことを思い悩んで泣き臥す
（池）殿におはしてなきねにふしくらし
（三十五オ／三十一ウ／053016／174⑩／118／232）

■64　藤壺の懐妊という密通の結末を、王命婦はあまりに嘆かわしく思う
（池）宮も猶いと心うき身なりけりと
（三十五ウ／三十二オ／053047／174⑬／119／232）

■65　ただ事ではない異様な夢を見た光源氏はわが身に起こる運命を知る
（池）中将のきみもおとろ／＼しう
（三十七オ／三十三オ／053160／175⑫／123／233）

■66　七月になり、宮中に帰参した藤壺へ桐壺の帝の寵愛はいっそう増す
（池）七月になりてそまいり給ひける
（三十七ウ／三十四オ／053233／176⑥／125／234）

■67　光源氏は六条京極から帰る途中に、帰京して療養中の尼君を見舞う
（池）かのやまてらの人は
（三十七ウ／三十四ウ／053288／176⑫／127／235）

■68　病床の尼君は、紫の上が成長した暁には光源氏に託すことを決める
（池）いとむつかしけに侍れと
（三十九ウ／三十五ウ／053416／177⑫／132／237）

■69　光源氏は紫の上の無邪気な声を聞き清純な彼女にいっそうひかれる
（池）いとちかけれは心ほそけなる
（四十ウ／三十六ウ／053492／178⑥／135／238）

■70　翌日、光源氏は尼君への見舞いとともに紫の上へも結び文をおくる
（池）又のひもいとまめやかに
（四十二オ／三十七ウ／053620／179⑤／139／238）

■71　十月に朱雀院の行幸が予定され、舞人は練習など多忙な日々を送る
（池）十月にすさく院の行幸あるへし
（四十三オ／三十八ウ／053711／180①／143／239）

■72　尼君の死去という知らせが届き光源氏は母更衣との死別を思い出す
（池）やまさと人にも
（四十三オ／三十九オ／053744／180④／144／240）

■73　夜、光源氏は自分から、忌みの期間が終わった紫の上の邸を訪れる
（池）いみなとすきて京のとのに
（四十四オ／三十九ウ／053797／180⑩／146／240）

■74　光源氏は少納言の乳母に紫の上への気持ちを伝えて歌を詠み交わす
（池）なにかかう
（四十五オ／四十ウ／053894／181⑦／149／241）

■75　尼君を恋い慕って泣く紫の上は、訪問した光源氏を父と勘違いする
（池）きみはうへをこひきこえ給て
（四十五ウ／四十一オ／053959／182①／152／242）

■76　少納言の乳母は紫の上を年よりも幼い様子であると光源氏に伝える
（池）宮にはあらねと
（四十六オ／四十一ウ／053986／182④／153／242）

■77　幼い紫の上の手を強引にとらえる光源氏に少納言の乳母は困惑する
（池）てをとらへたまへれは
（四十六ウ／四十二オ／054049／182⑪／155／243）

■78　あられが降り風が激しく吹く夜、光源氏は紫の上の御帳の中に入る
（池）あられふりあれて
（四十七オ／四十二ウ／054106／183②／157／244）

■79　少納言の乳母がため息をつく中、光源氏は紫の上に一晩中寄り添う
（池）めのとはうしろめたなう
（四十七ウ／四十三オ／054149／183⑦／158／244）

■80　女房たちは、悪天候の中での光源氏の訪問が心細さを慰めたと話す
（池）夜ひとよ風ふきあるゝに
（四十八ウ／四十三ウ／054209／183⑭／160／245）

■81　尼君の四十九日後に、兵部卿宮は紫の上を邸に引き取る意向を示す
（池）宮も御むかへになと
（四十八ウ／四十四オ／054258／184⑤／162／245）

■82　紫の上と別れた後、光源氏はかつて通った女性の家の門を叩かせる
（池）いみしうきりわたれる
（四十九ウ／四十四ウ／054287／184⑨／163／246）

■83　光源氏は紫の上のかわいらしい面影が恋しくて文を書き絵をおくる
（池）おかしかりつる人の
（五十オ／四十五オ／054351／185④／166／247）

■84　父兵部卿宮は少納言の乳母に、紫の上を引き取ることをうち明ける
（池）かしこにはけふしも
（五十ウ／四十五ウ／054377／185⑥／167／247）

■85　紫の上の着物がしおれているのを目にした兵部卿宮は、娘を憐れむ
（池）ちかうよひよせたてまつり
（五十一オ／四十六オ／054425／185⑪／168／248）

■86　少納言の乳母の言葉と紫の上の様子に兵部卿宮はもらい泣きをする
（池）よるひるきこゑ給に
（五十一ウ／四十六ウ／054484／186④／170／248）

■87　紫の上は幼いながらも、自分の身の上と今後の事を思って涙を流す
（池）ゆくさきのみの
（五十二オ／四十七オ／054542／186⑨／171／249）

■88　光源氏は宮中へ行く自分の代わりに、惟光を紫の上の屋敷に遣わす
（池）きみの御もとよりはこれみつを
（五十二ウ／四十七ウ／054588／186⑭／173／249）

■89　少納言の乳母は、屋敷を訪問した惟光へ自分の考えと不安を訴える
（池）少納言はこれみつに
（五十三オ／四十八オ／054632／187⑤／175／250）

■90　光源氏は惟光から父兵部卿宮が紫の上を引き取る予定であると聞く
（池）まいりてありさまなときこゑけれは
（五十四オ／四十八ウ／054698／187⑬／177／251）

■91　左大臣邸に来ている光源氏は惟光に紫の上を連れ出すことを命じる
（池）きみは大殿におはしけるに
（五十四ウ／四十九ウ／054757／188⑥／179／251）

■92　思案のあげく、光源氏は滞在中の左大臣邸から夜明け前に出かける
（池）きみいかにせまし
（五十五ウ／五十オ／054827／188⑬／182／252）

■93　少納言の乳母が応対に出るものの光源氏は制止も聞かずに奥へ入る
（池）かとうちたゝかせ給へは
（五十六オ／五十ウ／054889／189⑦／184／253）

■94　光源氏は父宮の使いであると嘘をついて、寝ている紫の上を起こす
（池）きみはなに心もなくね給へるを
（五十七オ／五十一ウ／054963／190①／187／254）

■95　二条院へ誰か来るようにと指示して、光源氏は紫の上を連れて行く
（池）きこゆこゝにはつねにも
（五十七ウ／五十二オ／055006／190⑤／189／254）

■96　少納言の乳母は困惑するものの紫の上のことを思って涙をこらえる
（池）二条院はちかけれは
（五十八ウ／五十二ウ／055081／190⑬／191／255）

■97　紫の上のために、光源氏は通常は使わない対屋に調度などを整える
（池）こなたはすみ給はぬたいなれは
（五十九オ／五十三オ／055147／191⑥／193／256）

■98　二条院へ連れてこられた紫の上は、気味が悪くなり体をふるわせる
（池）わかきみはいとむけつけう
（五十九ウ／五十三ウ／055173／191⑩／195／256）

■99　少納言の乳母は、輝くばかりの立派な二条院で間の悪い思いをする
（池）あけゆくまゝにみわたせは
（六十オ／五十四オ／055205／191⑬／196／256）

■100　かわいらしい女童を呼び寄せた光源氏は休んでいた紫の上を起こす
（池）御てうつ御かゆなと
（六十ウ／五十四ウ／055247／192④／197／257）

■101　紫の上の気をひこうと、光源氏は面白い絵などを見せて相手をする
（池）御かたちは
（六十一オ／五十五オ／055301／192⑨／199／257）

■102　紫の上は光源氏が留守にしている間に、二条院のあちこちを見回す
（池）ひんかしのたいにわたり給へるに
（六十一ウ／五十五オ／055341／192⑭／201／258）

■103　留守にする光源氏は紫の上のために手習いの手本などを残していく
（池）きみは二三日内へも
（六十一ウ／五十五ウ／055377／193③／202／258）

■104　光源氏は紫の上へ手習いを教え、人形などの家を作って一緒に遊ぶ
（池）いてきみもかいたまへとあれは
（六十二オ／五十六オ 055428／193⑨／203／259）

■105　事情を知らぬ兵部卿宮は紫の上の失踪を嘆き、少納言の乳母を疑う
（池）かのとまりし人々は
（六十三オ／五十七オ／055505／194④／206／260）

■106　継母の北の方は、紫の上を意のままにできなくなったのを残念がる
（池）きたのかたも
（六十四オ／五十七ウ／055584／194⑫／209／260）

■107　紫の上は尼君を慕って泣く時があるものの、光源氏にもなれ親しむ
（池）やう／＼人まいりあつまりぬ
（六十四オ／五十八オ／055597／194⑭／210／261）

■108　光源氏は、かわいらしい紫の上を「風変わりな秘蔵っ子」だと思う
（池）ものよりおはすれは
（六十四ウ／五十九オ／055646／195⑤／211／261）

「鷺水庵より」にて、2016 年 09 月 15 日公開データ
2018 年 03 月 24 日、編集まとめ